

## 熱田神宮と能役者

—宮福太夫と松岡市郎太夫—

### 一 はじめに

宝暦一二年に出版された『改正能訓蒙図彙 下巻』<sup>①</sup>に、尾州住の役者として「金春甚三良弟子 宮福太夫」という名が載る。この宮福太夫については、『名古屋市史（風俗編）』（以下『市史』と略称）に、右の尾州住宮福太夫を金春甚三郎の弟子となす、猿楽諸流系譜の諸国猿楽座を記したる条に、尾州宮福とあり、座名なるが如し、又文政元年二月、熱田勸進能の願主に、大岡宮福太夫あり、此宮福は熱田の社家にして、木下正三郎の門人、且つ申樂座なりと云へり、然らば尾州にては、熱田に在りし座名を継承して称へしものならんか、

とある。金春甚三郎は林家（金春喜左衛門家）の第八代目で、尾張藩の太夫である。宝暦年間の宮福太夫はこの弟子で、太夫とあるから、金春流のシテ方であると言える。一方木下正三郎は観世流のシテ方であるから、文政年間の宮福太夫は観世流のシテ方であると言

飯 塚 恵 理 人

える。宮福太夫は本来熱田神宮の「猿楽」であり、『熱田神宮史料 造宮遷宮編（上・中・下巻）』<sup>③</sup>所収の「慶応二（一八六六）年御遷宮御用留」に記事が載ることから、幕末まで家が続けていたことがわかる。本稿では、この宮福太夫について、管見に入った資料から現在の段階で明らかとなった事項を述べたいと思う。また、この宮福太夫の記事を調べるうちに、熱田神宮の社家で松岡市郎太夫というものが、「御役者並」として尾張藩に抱えられていたことがわかった。この「御役者並」という職については、『市史』等にも報告されていないので、ここで報告させて頂きたいと思う。これらの考察から、熱田神宮と猿楽・能との関わり、尾張藩の御役者の登用の方法について考えてみたい。

### 二 文政二年の熱田勸進能番組—大岡宮福太夫

『市史』に「文政元年二月、熱田勸進能の願主に、大岡宮福太夫あ

り」とある。この記事の出典は明示されていないが、尾張藩士水野正信著の『青窓紀聞 巻三』の「文政元年寅年」の記事にこの番組が載せられている。『市史』の能関係の記事には、『青窓紀聞』が頻りに利用されており、この部分も『青窓紀聞』に依ったと考えるのが自然である。

番組は後で挙げるが、実はこの催しは文政二（一八一九）年に行われたと考えられる。理由の一つは、文政への改元は四月二二日に行われており、文政元年に二月が存在しないことである。もう一つは、これと同じ番組が高力種信の『金明録』『猿猴庵日記（日本都市生活史料集成所収本）』（以下『猿猴庵日記（都）』と略称）『猿猴庵日記（名古屋叢書本）』（以下『猿猴庵日記（名）』と略称）の文政二年に相当する部分に載せられていることである。そこで本稿ではこの「大岡宮福太夫」の主催した勧進能が文政二年のものであると考へ、まずこの番組の検討から、宮福太夫について知られることについて述べたい。

『金明錄』『猿猴庵日記(都)』『猿猴庵日記(名)』は、ともに高力種信の著であるが、この催しに関する記述は少しずつ異なる。まず、『金明錄』の文政二年二月の項を挙げると以下のようなになる。

廿一日より三日之間、熱田神事能。場所は、海蔵門前二軒茶屋の北に、東向に舞台を懸、上は花色の幕二而水引は白なり。柱毎に葉竹を立、しめを引。見物は天井なし、庭上に並居る。是に宮福太夫木下正三郎、其外、府下町家の輩相勤む。其外、近國よりも出勤有之。初日番組、高砂 八嶋 羽衣 舟弁慶 祝言金札 狂言文相撲 千鳥 悪太郎 之筈也。然所、当日脇方延着、其上、内輪入組等有之、初り大遅刻二而及暮候故、二番

初回

公卿

五卷  
面第  
三卷

長尾宮虎

高砂

砂 小川

豐田重秀 川原彦次  
吉田彦秀 小川竹次  
松田了齋 阿部重三

八  
名

山下花新

拓拉子齊 梅村次子  
四升光三子

羽衣

衣 小川

江本修片 中江氏去  
 大正三年 昌田漢

船名表

卷二

豊田重吉 安藤重吉  
島本重吉 梅村重吉

金札

礼  
崇

石門三才の徳を  
是を述べて作

志下ひ舞能の能  
あつ二部系屋のや

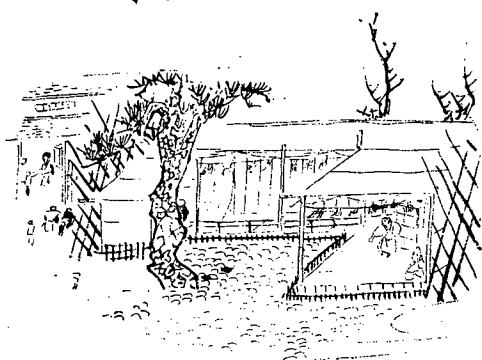
願主

大國寶福堂

杉本佐和次

佐和次

右の通り、豊田村の  
中樂の丸の——田舎  
つぎなり



(写真1)『青窓紀聞』文政二年二月熱田勸進能の絵・初日番組

二而終る。則、左之通也。

初日 廿一日

千歳 橋本佐和次

翁 三番叟 長尾寅藏

面箱 土井鉄藏

大岡釜次 豊田李左衛門 川原彦次郎

高砂 小川庄右衛門

文相撲 吉田彦太郎 小川竹次郎

釜次 小林五十五郎

祝言金札 鈴木伝左衛門 服部長三郎

庄右衛門 岡田半十郎 佐藤徳兵衛

二日目 廿二日

千歳 大岡釜次

翁 三番三 土井鉄藏

面箱 長尾寅藏

橋本佐和次 鈴木伝左衛門 中野真吉

九世戸 小川庄右衛門

坂元藏 岡田鉄藏

大岡釜次 柘植万次郎

田村 黒田鏢藏 梅村吉六

長谷川佐藏

木下正三郎 石原三右衛門 柴田豊太郎

三輪 小川庄右衛門

丹羽宗右衛門 小川竹次郎

村瀬清八郎 豊田李左衛門 川原彦次郎

葵上 同人

森徳太郎 同人

大岡釜次 鈴木伝左衛門 服部長三郎

熊坂 小川庄右衛門

柴田友吉 佐藤徳兵衛

橋本佐和次 豊田李左衛門 柴田豊太郎

舟弁慶 同人

成田熊四郎 梅村吉六

附祝言

八幡前 梅村権助

子盗人 山田悦藏

不腹立 湯浅孫兵衛

靱猿 長尾寅藏

已上

廿三日、雨天二而延引。廿四日も快晴なれど延引。

三日目 廿五日

千歳 橋本佐和次

翁 三番叟 小林五十五郎

面箱 梅村権助

木下正三郎 山本安内 安藤全之助

東方朔 藤村又藏

白井光三郎 梅村吉六

小川徳之助	石原三右衛門	佐藤徳兵衛
経政	黒田鑠蔵	
羽衣	吉田彦太郎	中野真吉
木下正三郎	柘植万次郎	
小川庄右衛門	岡田半十郎	梅村次郎吉
橋本佐和次	鈴木伝左衛門	
鉢木	大野猪三郎	梅村吉六
橋本佐和次	山本安内	伊藤仙次郎
融	小川庄右衛門	梅村次郎吉
附祝言	成田熊四郎	
千鳥	寺沢栄四郎	
止動方角	小林五十五郎	
以上		

これと同じ催しの番組は『青窓紀聞』『猿猴庵日記(都)』『猿猴庵日記(名)』にも載るが、演目・人名(人名は『青窓紀聞』にのみ載る)に若干の違いがある。というのは、『金明録』所収の番組には、ワキ方の遅刻による進行の遅れまでしるしてあり、実際に行われたものを記した番組であると考えられるのに対して、その他はいずれも予定番組であったと考えられるのである。一日目のワキ方の主要人物は小川庄右衛門であり、この延着によって三日目の番組は予定と相当入れ替えられた。

宮福太夫は大岡という姓からこの番組中の大岡釜次であると考え

られる。文政二年から二三年後の「天保十三年大宮仮遷宮御用留書」に「同六日、大岡宮福大夫与服中二付、出勤差支候間、倅釜次郎代勤為仕度旨、願書差出申候。」とあり宮福太夫が遷宮の時勤めるべき役を倅「釜次」が勤めた記事がある。「釜次」の名も代々の名である可能性はある。大岡釜次は初日の「翁」の翁と、「高砂」「金札」のシテ、二日目の「翁」の千歳、「田村」「熊坂」のシテを勤めている。この三日間の能番組における大岡釜次の役は、木下正三郎・橋本佐和次とはほぼ同格の重要な役である。この大岡釜次はある程度の技量があった能役者だったと考えられる。

### 三 踏歌神事と宮福太夫の「翁」

熱田神宮で正月一日に行われた踏歌神事に、宮福太夫が翁を勤める記事が、『熱田祭奠年中行事図会』(以下『図会』と略称)に記載されている。同書は『蓬左文庫図録』<sup>⑩</sup>によれば、

熱田神宮の神事・祭典を十二カ月にわけて図説し、あわせて熱田界限の風物をも極彩色の密画で描いたもの。(中略)本書はその原本で、著者・絵師ともに明らかでないが、画風からみて、江戸末期の大家森高雅(玉僊)説が有力である。というもので、江戸末期に描かれた一〇冊本である。

この『図会』に書かれている各行事の解説の文章については、『神道大系』<sup>⑪</sup>に「行事の解説部分には『故実考』の本文を書き下しにしている。」という指摘がある。そしてこの『図会』の解説に、踏歌神事の概要が述べられている。

この『故実考』こと『熱田祭奠年中行事故実考』<sup>⑫</sup>(以下『故実考』

と略称)の性格は、『神道大系』によると、「寛政年間に当宮祢宜の粟田衛富が記した『熱田御祭年中行事』を原にして、これを解説する形式で、各祭典に係る資料を列記するもの」で、「本書は寛政七(一七九五)七月以前に成立していたと考えられ、恐らく、その年次を余り溯らない時期であろう。」というものである。これによれば、『図会』の解説は『故実考』によつたもので、寛政前後の踏歌神事を伝えていると考えられる。そこで、この『故実考』の行事解説部分を引用すると(旧漢字の一部は新漢字に改めた)、

十一日 踏哥神事

早旦、大福田宮、陪從、高巾子、笛役出仕、有酒講、出自祝師、畢而哥竹川半首、退出、行列シテ至鎮皇門前、又哥半首、進政所、時二詩頭一人 祝詞師 歌頭一人 大内人、其外神官、三老 権内人、檢校大夫、別当大夫、舞人十人出仕、有酒講、酒講者祝師、総檢校出隔年、酒講畢而陪從、舞人、各桜・款冬挿頭附冠額、次又哥半首、次於政所南哥此殿、竹川二首、有卯杖舞、畢而行列、至大宮入海藏門時、哥半首、進白洲、先萬春樂、卯杖舞、扇子舞、竹川、此殿、淺花田、畢而高巾子懸神面振鼓、詩頭誦踏哥詩頌、畢而有翁舞、大夫宮福勤之、惣退出、又行列而至八鋸宮同断、次二大福田宮同断、但シ、大福田宮大宮司参向、樂官奏音楽、畢而惣退出、此日儀式、大宮司紫袍束帶、神官中黒袍束帶、三老黒袍重衣冠、陪從淨衣衣冠、舞人小忌舞袴、此日号強張免、古来熱田百姓貢進納米六斗式升一合所司、舞人 九斗六升 内人、舞人 今出自神納十五石之内、各頂戴(戴)之、又為初舞人祝儀、開闔、所司方へ有祝儀品、となる。踏歌が行われた後に宮福太夫が翁舞を舞うこととなつてい

る。政所と八鋸宮では同様の行事がなされたところから、宮福太夫は一日に二回翁を勤めたと考えられる。この翁は、最後の退出の際に「なにそもそも」と呼ばれる踏歌にあわせて舞うという特徴があつた。このことは『熱田神宮の踏歌神事』(以後『踏歌』と略称)に引用されている「熱田神宮踏歌神事規式次第」に

椎木下ニテ西方万秋(春) 樂舞三遍、夫ヨリ竹川ニテ舞初ル、一順相濟夫ヨリあさはなた謡初扇舞初ル、夫ヨリ陪從席へ着、シラス西ノ方東面宮福大夫舞アリ、何そもそもニテ三遍舞終ル、とあることから伺われる。この宮福太夫が舞う「なにそもそも」と呼ばれる踏歌は、『故実考』に「神宮伝来踏哥譜」の引用として載る。これを引用すると、

退出

何そもく何そもくあやかやにしきかや何そもく何そもく何そもく何そもくいかやわたかや何そもく何そもく何そもく何そもくいねかやもみかや何そもく

となる。この翁は最後に踏歌に合わせて舞うという特徴があり、この特徴は、翁が踏歌神事の一部として奏せられるために生じたものと考えられる。

この翌日の十二日に、宮福太夫は「名残翁舞」を舞うこととなつていた。このことに關しては同じく『故実考』に

十二日朝 大福田宮名残翁舞 大夫宮福勤之、翁田七反半、

自神領之内賜之、

元禄記云、十一日、神役等、各大宮司着座、有一禮、翁舞不過以前退出、故二大宮司家為一禮、今朝勤之、其節大司達之、と載る。これによれば、一二日の朝、大福田宮で宮福太夫が翁を勤

めることとなっていたことが知られる。また宮福太夫が「翁田」として神領から七反半を得ていたことも分かる。この「名残翁舞」の奏せられる時刻と場所については『尾張年中行事絵抄 上』(以下『絵抄』と略称)に「十二日、熱田大福田、名残之翁。是は、辰の刻拝殿にて、宮福太夫、翁を舞ふ。」とあり、辰刻に大福田宮の拝殿で行われたと考えられる。但し、古くから拝殿で奏せられたものではないようで、『踏歌』では「熱田神宮年中神祭定日儀式」の、

一、同十二日 辰刻 名残翁

右、於大福田社本殿拝殿之間大夫宮福勤之、の記事を挙げ、「上記資料に拠ると、十二日辰刻(現在の午前八時頃)大福田社の本殿と拝殿の間で、宮福太夫が翁舞を行っていたが、文政年間には(中略)拝殿にて行われた」と、かつては屋外で奏せられていたと述べる。

『図会』には、この踏歌神事の絵が一〇枚にわたって描かれている。この内、宮福太夫が描かれているものについてはその写真を載せることとし、それ以外については絵に書かれた解説のみ挙げることにする。(原本には振り仮名が付されているが省略した。旧漢字は新漢字に直し、句読点等を付した。)

(一) 十一日 踏哥神事 俗にべろく祭といふ。

此日大福田の宮、拝殿に、舞人・倍従をのく出仕し、政所に揃ひ、鎮皇門前にてうたひ物あり。それより海蔵門に入て、西薬所前にてうたひ物あり。それより、神前にむかひ、祭事次のことし。

(二) 其二 卯杖の舞

田嶋氏・大喜氏ハ、当日黒袍を着す。又、祭文殿西の方に黒

袍を着居るは、頭人 卿頭・補代二人列座 也。卯杖ハ、杖の頭をわらにて巻き、中へ五穀を入たる物なり。

(三) 其三 扇子の舞 はだをぬきまふまひなり。

田嶋・大喜ハ、笏のまひなり。(先頭の人物は笏を持っている。)

(四) 其四 (解説不記。「其三」の図の右側に描かれている人物は、はだぬぎで、右手に扇子を持っている。)

(五) 其五 ふりつゞミを振るてい

祝師 田嶋 踏哥の辞を読む。此巻物、右のかたへさし出せば、鼗鼓ふる社人、右の方へ振る。又、左へ出す時は、左へ向ひふる也。高巾子の冠を着し、古面をかける。

(六) 其六 翁の舞 宮福太夫これをつとむ。

舞畢て、此大宮の祭式済ミ、又八劔宮に至る。

(七) 其七 舞人・倍従大宮より八劔宮へ行列のてい

宮福太夫先に立、次に田嶋・馬場・舞人・倍従と各列し、八劔宮にいたり、此所の祭式、大宮にかはる事なし。依て図を略す。

(八) 其八 大福田踏哥 卯杖舞

八劔宮祭式畢て、当社の神前と拝殿の間にて勤む。

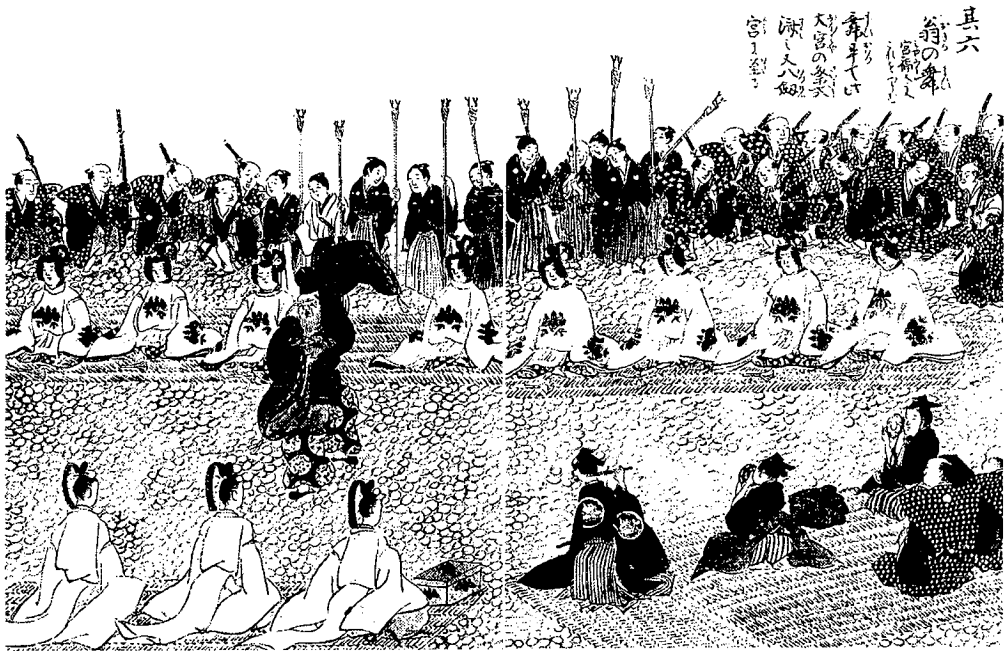
(九) 其九

大福田にて式ある時、楽所にて音楽を奏す。拝殿の前に八假屋を立、此所へ大宮司出仕す。又、翌十二日早朝、此拝殿にて、宮福太夫ばかり出て翁をまふ。図ハ次に出す。

(一〇) 十二日 早朝

大福田の拝殿にて宮福太夫翁を舞ふ。是を名残の翁といふ。

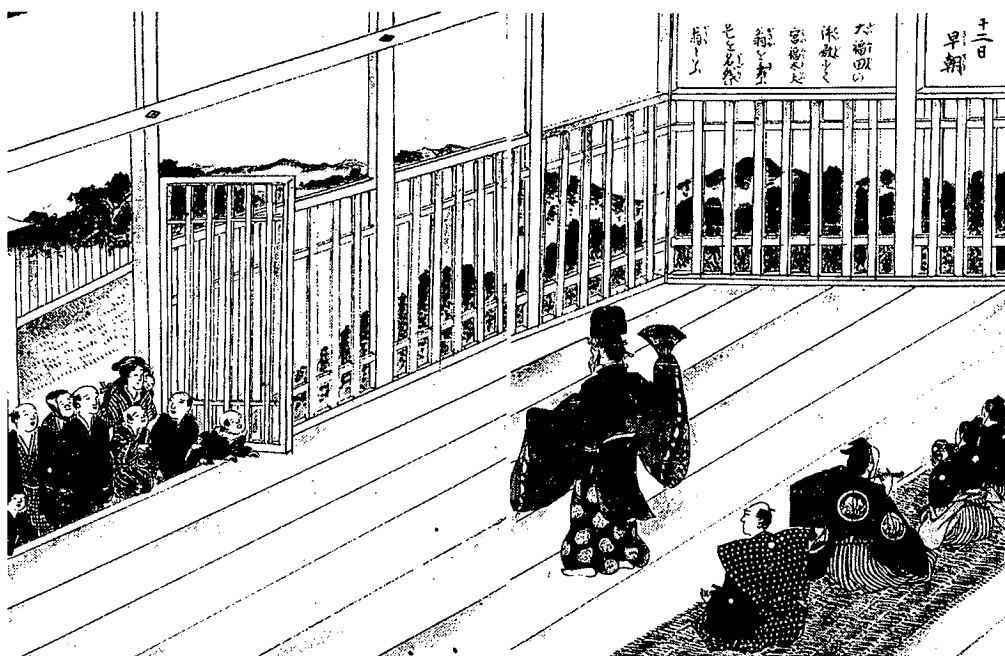
このうち、宮福太夫が描かれているのは(六)(七)(一〇)の三枚である。それぞれ(六)を写真2、(七)を写真3、(一〇)を写真



(写真2) 翁の舞



(写真3) 舞人倍従大宮より八劍宮へ行列のてい



(写真4) 十二日早朝 (名残翁舞)

4に挙げた。

写真2の(六)は政所の南で、宮福太夫が翁を舞っている絵である。場所は白州で、宮福太夫は靴を履いている。笛・小鼓・地謡は莫菴の上に座っている。小鼓・地謡とも二人しか描かれていない。「二人翁」の形式であったのではないかと思われる。写真3の(七)では、行列の先頭、向かって左側の人物が宮福太夫であると思われる。翁の装束のままで行列の先頭を勤めたものと考えられる。写真4の(一〇)、名残翁舞は拝殿で勤めている。囃子方・地謡はやはり莫菴の上に座している。小鼓は二人・地謡は一人が描かれているが、これも「一人翁」の形式だったと考えられる。前述の「踏歌」の記述から、この「名残翁舞」も、本来は屋外で行う物だったと考えられる。

『図会』から、この踏歌神事が、踏歌に合わせた舞のみならず、「扇舞」「振鼓」「卯杖舞」なども伴った、舞を中心とした神事であったことが知られる。宮福太夫の「翁」もこのような神事の際の「舞」の一つとして行われていると言える。

この踏歌神事で翁の行われる理由について考えたい。『故実考』は名残翁舞が奏せられる理由について、「元禄記」の記事の引用の形で、一日の踏歌神事の際には大宮司が翁舞の済む前に退出するので、大宮司の為に行うとする理解が示されている。これに対して『絵抄』<sup>20</sup>は、やはり名残翁舞について述べる部分に「此翁の舞有事は、むかし神祭の後宴として、織田家の四代には神事能ありし由、その遺風なりとかや。」とする。熱田が織田氏の支配であった室町期に行われた神事能が簡略化されて、翁のみ残っているとする説を挙げるのである。『絵抄』は名残りの翁のみを神事能の遺風と考える。これ



に対して『張州府志 卷第五 熱田志』の「熱田社四序祭奠略」の正月一日踏歌の項には、「翁舞俳優勤之古者今日行猿樂之能今僅翁舞而已行之」とあり、この日の翁舞そのものが、猿樂能のあつた遺風であつたのである。同書は名残りの翁についても、

又十二日朝於大福田社近地俳優為翁舞謂之名殘翁謹按古此日有猿樂儀大宮司等見之蓋似祭祠後宴矣今為翁舞者其遺風也耳

と述べる。近世以前に熱田神宮で猿樂の能が行われていたか否かは番組が管見にないので不明である。番組等資料が見つかることを切望している。

#### 四 宮福太夫の役儀

宮福太夫の、熱田神宮における地位を考える資料となるものに「熱田祠官略記」がある。この書によれば、「猿樂」は「……神樂役 惣ノ市 神樂市 焼夫 雁使 猿樂」と、「祠官」の最後に載せられている。また「熱田宮祭奠略記」（『熱田神宮史料 年中行事編下巻』四七四頁）には焼夫と猿樂太夫の家について「左之二家不入一社中賤職也」と載る。宮福太夫の役儀については「熱田祠官祠掌私記」に

神宮猿樂ノ能大夫

宮福太夫

正月十一日御祭ニ政所方社家中行列之先ニ立、

本宮、八剱宮、大福田ニて翁勤ル、其外役儀、神事之次第書

ニ記ス、

とある。この「神事之次第書」が未調査であるため、これ以上の役儀について明らかにし得ないが、宮福太夫の役儀について「翁」を勤めることよりも先に、行列の先に立つことが記されていることは

興味深い。というのは、『応永二十六年大宮御遷宮供奉人差定』の「太宮〇御遷宮供奉人事」という当日の行列の順番を書いた部分に「一番 咒師 猿樂」とあり、「猿樂」が先頭を勤めることになっていたのである。この書の末尾の「右、任先例所定如件、」が定型文であるとしても、応永二六（一四一九）年以前から熱田神宮に「猿樂」を勤めるものがあり、それが遷宮の行列の先頭を勤めることとなっていたものであろう。『長祿二（飯塚注：一四五八）年熱田大神宮渡用御殿御遷宮供奉人差定』においても「一番 咒師 猿樂」とされており、応永二六年と同じである。江戸初期の姿を伝える「熱田宮遷宮絵巻」にも先頭左側に素袍・平烏帽子姿の「猿樂太夫」が描かれている。この装束が遷宮の際の「猿樂太夫」の通常のものであったと考えられる。『張州雜志 卷第三十七』に載る「貞享三（飯塚注：一六八六）丙寅閏三月六日亥上刻大宮外遷宮之次第」には、行列の先頭を「右 咒師 高田村陳内 左 猿樂 大岡福太夫」と記す。「大宮司諸事留書」にはこの時の遷宮の「一宮福太夫正假遷宮ニ素袍袴烏帽子着用仕、先年も御供仕由申候、此度も先年之通供奉仕度由奉願候」という願書が載る。また「享保七（一七二二）年正遷宮留書」には「假遷宮之節ハ能装束ニ而相勤させ候。」と行列の際能装束を用いたという記事がある。この時「正遷宮ニハ素袍袴ニ而相勤させ申候。」と通常通りだった。「慶応二年（一八六六）御遷宮御用留」には、宮福太夫よりの「毎年五月八月御神事之節ハ翁装束仕儀ニ御座候間」と翁装束を着用したいという願書が載る。これは許可された。踏歌の行列の際先頭を勤めるのも、このような「猿樂」の役儀と関係するものであろう。

## 五 熱田神宮の翁面

『張州雜志 卷第四十一』<sup>(31)</sup>の「熱田宮神宝部之二」には、白式尉・黒式尉の二面が載せられている。この部分の記事を引用すると、

翁面 黒白 二面

是正月十一日之神事翁舞所用也即猿樂者宮

福大夫力家預戴ム

證文云白色尉面 木和樟 聖徳太子作 代金五

十数枚

出目苗祖三光入道正満 十一胤 出目法眼若狭大掾

入道御用御面所従五位下天下一作者藤原壽満

黒色翁面作同之云

というものである。そして「白色翁」「黒色翁」の絵が描かれている。この記事から、熱田神宮には白式尉・黒式尉の二面が伝来されてきたことがわかる。また白式尉は正月一日の神事に使われるとあるから、踏歌神事に用いられたと考えられる。黒式尉は踏歌神事の翁に用いられたか否かは不明である。『図会』の正月二八日の大々神楽に「矛之舞」というものがあり、その絵が載せられている。解説文に「其七 矛舞 黒き尉の面をかけほこを持てまふ」とある。ここで使用されている面は明らかに黒式尉である。あるいは、この大々神楽に用いられたものではないかと考えられるのである。同じ大々神楽には金色の翁面を用いる舞もあつたらしい。これは「ゑらぐの舞」というもので、これも『図会』に「其十三 ゑらぐのまひ金色翁の面を着てまふ」と絵入りで載せられている。

白式尉・黒式尉は、壽満の鑑定の「聖徳太子作」ということはも

とより信じられないとしても、前述の通り、応永二六年にはすでに熱田神宮に「猿樂」はいたのである。「翁」もかなり古い時代から行われていたとしても不思議ではない。

## 六 太鼓役者 松岡市郎太夫のこと

「熱田祠官祠掌私記」<sup>(32)</sup>の「八鍛宮附中臈之社家」に、「松岡市郎大夫 殿様太鼓役者 親代与相勤之」と言う記載がある。熱田の中臈の社家の中に尾張藩の御役者で太鼓方を勤める者がいたということになる。漢字の「太」と「大」は紛らわしく、大鼓方であつたかも知れない。今後番組が見つかることを願っている。松岡市郎太夫は、熱田神宮における祠官としての身分から言えば、「中臈之社家」であるから、中臈以上の社家の名簿に見あたらない宮福太夫よりも高かつたと考えられる。この「熱田祠官祠掌私記」は、『神道大系』に収められているが、この性格については同書の解説に

当宮の社家の構成は、基本的には大宮司を筆頭として、神官・中臈・祝部及び神子座よりなるが、本書はこれら社人の奉仕する神役の内容、その役に携わる社家の家筋とその変遷を述べ、一部に系譜を入れて説明したものである。(中略)その本文を検討すると、随所に元禄十六年(一七〇三)より宝永三年(一七〇六)までの年紀が散見しており、最も年次の新しい宝永三年を大幅に降ることはないものと推定される。

とあるから、ここに載せられる松岡市郎太夫は宝永年間あたり的人物と推定される。松岡市郎太夫の名は『藩士名寄 神主ノ部』<sup>(33)</sup>にも載る。これを引用すると、

熱田社家

松岡市郎太夫

一 享保六（一七二一）丑十月、代々御役者並相勤候処、依願御役者御免。御切米・御扶持被召上。御祈禱之儀ハ、只今迄之通被仰付、毎歳銀五枚宛、御側方可被下置旨被仰出。

となる。この『藩士名寄』の記事から、松岡市郎太夫が「御役者並」という職に就いていたことがわかる。享保六年は宝永三年の一五年後であるから、あるいは「熱田祠官祠掌私記」と『藩士名寄』に載る松岡市郎太夫は同一人物であるかも知れない。なお『藩士名寄』の松岡市郎太夫は翌年の「享保七（一七二二）年仮殿御遷幸供奉行列次第」<sup>⑤</sup>「享保七年正遷宮供奉行列次第」<sup>⑥</sup>に載る松岡市郎大夫助邦と同一人物である可能性が高い。この助邦の親は「貞享三（一六八六）年仮遷宮行列次第」<sup>⑦</sup>「貞享三年正遷宮行列次第」<sup>⑧</sup>に載る松岡市郎大夫助度であろう。この「御役者並」の職は「代々」とあるので、一代抱えではなかったと言える。少なくともこの助邦と助度は「御役者並」であった可能性が高い。雇用の形態としては、「御祈禱」の御用が本職であるものに、御役者を兼職させた形と考えられる。松岡氏に限って言えば、享保六年で能役者としての雇用は終ったと考えて良いだろう。このような「御役者並」の具体的な勤務内容は未詳であるが、「御役者」以外に尾張藩に能楽のために代々雇用されていたものがある点には注意すべきと思われる。

七 まとめと今後の課題

宮福太夫を中心に、熱田神宮関係の資料から現在の所管見に入っ

た資料をまとめてみた。宮福太夫の系譜に関する資料はなく、資料不足はなんともしがたい。番組等ご存じの方があれば是非とも御教示いただければと思う。

御役者は代々能役者の家から抱えられた者ばかりではない。能を得意とするものがない、そのなから雇用する形があり得た。松岡市郎太夫も社家であつたものが太鼓（又は大鼓）の技量をもって兼職の形で尾張藩に抱えられたものと考えられる。このことは名古屋にも尾張藩の御役者以外に相当数の市井の能役者がいたことを示すのではなからうか。今後、このような尾張藩の御役者の取り立てと市井の役者の関係についても調べて行きたい。

注

- (1) 『能之訓蒙図彙』 表章 能楽資料集成10 わんや書店 昭和五五年八月発行 一八一頁
- (2) 『名古屋市史（風俗編）』 著作兼発行者 名古屋市役所 大正四年八月発行 一四九―一五〇頁
- (3) 『熱田神宮史料 造宮遷宮編（上・中・下巻）』 熱田神宮官庁編集（上巻）昭和五五年三月発行（中巻）昭和六〇年一〇月発行（下巻）平成五年六月発行、当該部分は（下巻）四四―四五頁、八二頁
- (4) 『青窓紀聞』 名古屋市蓬左文庫蔵 所蔵番号：三三―三
- (5) 『金明録』 名古屋叢書三編 一四 名古屋市蓬左文庫編集 名古屋市教育委員会 昭和六一年三月発行 三九〇―三九二頁
- (6) 『日本都市生活史料集成 四 城下町篇Ⅱ』 編集代表 原田伴彦 学習研究社 昭和五一年一月発行 五八五頁
- (7) 『猿猴庵日記』 名古屋叢書 第一七巻 名古屋市教育委員会編 愛知県郷土資料刊行会 昭和五八年一月再版発行 二五六―二五七頁
- (8) 同注3（中巻）四三八―四三九頁

- (9) 【熱田祭奠年中行事図会】 名古屋市蓬左文庫所蔵 所蔵番号二八  
一四
- (10) 【蓬左文庫図録】 名古屋市蓬左文庫編集 名古屋市教育委員会 昭  
和五八年一〇月発行 九三一九四頁
- (11) 【神道大系 神社編十九 熱田】 小島鉦作 井後政晏校注 神道大  
系編纂会 平成二年三月発行 解題 四一頁
- (12) 同注11 解題 三八頁
- (13) 同注11 解題 三九頁
- (14) 同注11 二五四—二五五頁
- (15) 【熱田神宮の踏歌神事】 熱田神宮文化叢書第五 熱田神宮宮庁 昭  
和五一年四月発行 三四—三六頁 資料二〇
- (16) 同注11 二五八頁
- (17) 同注11 二六〇頁
- (18) 【尾張年中行事絵抄 上(解説編)】 名古屋叢書三編 第五卷 名  
古屋市蓬左文庫編 名古屋市教育委員会 昭和六三年三月発行 一六  
頁
- (19) 同注15 四一頁 資料三七
- (20) 同注18 一六頁
- (21) 【張州府志 卷第五 熱田志】 名古屋市蓬左文庫所蔵 所蔵番号二  
二七—四一—
- (22) 同注11 四七一頁
- (23) 同注11 四八四頁
- (24) 同注11 三七三頁
- (25) 同注11 三七五頁
- (26) 同注3 (上巻) 八一—八二頁
- (27) 【張州雜志鈔】 熱田神宮宮庁編纂 熱田神宮宮庁 昭和四四年六月  
発行 卷第三十七 二七七頁
- (28) 同注3 (上巻) 三八四頁
- (29) 同注3 (上巻) 七二頁
- (30) 同注3 (下巻) 四四—四五頁

- (31) 同注27 卷第四十一 三七七頁
- (32) 同注11 四九三頁
- (33) 同注11 解題 六三頁
- (34) 【藩士名寄 神主ノ部】 名古屋市蓬左文庫所蔵 所蔵番号二四一  
一一—三八
- (35) 同注3 (上巻) 六九三頁
- (36) 同注3 (上巻) 七〇四頁
- (37) 同注3 (上巻) 二二五頁
- (38) 同注3 (上巻) 二三五頁

補記

貴重な資料の閲覧・写真の提供を頂きました名古屋市蓬左文庫に  
心より感謝致します。また、本稿を為すに当たりまして、御教示を  
頂きました蟹江和子氏、栗花光弥氏に心より感謝致します。なお本  
稿は平成九年度文部省科学研究費助成奨励研究(A)「東海地域近  
世・近代能楽資料の収集と整理」(課題番号:〇九七一〇三一六)に  
よる成果の一部となります。